

ゲーテ『親和力』のオットーリエの聖別に関して ——聖オディーリアとの比較検証、また庭園様式のからの考察

伊 東 麻 衣

ドイツ文学専門 博士前期課程 2 年

1. はじめに

ゲーテ『親和力』*Die Wahlverwandtschaften* (1809年)の登場人物の一人オットーリエは、既婚者に恋をするが、その恋人の子供を死なせてしまったことによって罪の意識を持ち、絶食により若くして命を絶つ。それは一種の贖罪行為と見なされるが、彼女に関しては死後奇跡を思わせる描写があり、多くの人々が彼女が埋葬された礼拝堂を訪れたと言われて物語は終わる。このような彼女の聖別をめぐる先行研究でも肯定意見・否定意見があるが、報告者は彼女の姿に神聖さを見、そこに託された意味を明らかにすることに努めている。

ゲーテは自伝『詩と真実』(第三部1814年)において、アルザスのオディーリエンベルク修道院を訪れ、その守護聖人オディーリア(660頃-720)に感銘を受け、後にその聖女の名前を自分の娘(=『親和力』のオットーリエ)に与えたと語っている。だがゲーテの記述自体がほんの数行にすぎず、それ以外には書簡や日記にもオットーリエのモデルに関する記述は一切ない。そこで本調査では、オットーリエの神聖さに託された意味を明らかにする手がかりとして、「聖別」のモデルとして実在の聖人オディーリアとの比較検討を試みる。だがオディーリエンベルク修道院は、人里離れた山中に位置しているため、情報収集が困難である。そのため、実際に訪問し、聖オディーリアに関する文献収集を行うとともに、今日における巡礼の実態を確認する。

また『親和力』では庭園が物語の構造上重要な役割を果たしている。それまで一般的だったフランス式庭園に対し、イギリス式庭園が作品の当時ブームになってきていた。当時の有名なドイツの庭園論者としてヒルシュフェルト(Christian Cay Lorenz Hirschfeld, 1742-92)という人物があげられるが、ゲーテもまた彼の著作に影響を受けている。そこで、ヒルシュフェルトとゲーテに関わりのある庭園を調べることで作品への影響を探るが、国内で入手できる文献のみでは庭園の実

際の風景・構成は把握しづらい。よって実際に庭園内を散策し、その風景・植物を見ることで、その実態を把握する。訪問する庭園としては、ヒルシュフェルトがドイツにおける最高傑作だと評し、ゲーテも賛美し何度も訪問したとされるヴェルリッツ庭園、そしてヴェルリッツ庭園に影響を受けてゲーテが作った、『親和力』の舞台とも言われるワイマールのイルム川沿いの庭園と、ゲーテが死ぬまでの約50年を過ごしたゲーテハウスの一角の庭園、また、ヒルシュフェルトの影響が見られ、『親和力』の舞台描写との関連があると先行研究で指摘されるグロースコッホベルクの庭園である。

2. 調査日程

2012年9月11日

オディーリエンベルク修道院にて聖オディーリアに関する情報収集。

2012年9月13日

ワイマールにてゲーテのハウスの庭園とイルム川沿いの庭園を調査。

2012年9月14日

グロースコッホベルクの庭園を調査。

2012年9月15日

ヴェルリッツ庭園を調査。

3. 調査結果

3-1. オディーリエンベルク修道院での調査

3-1-1. 聖オディーリアの生涯

修道院にて得られた文献より、聖オディーリアの生涯に関して以下のことが分かった。

聖オディーリアは、アルザスの守護聖人であり、その生涯の大部分は9世紀に書かれた物語 „*Vita sancta Odiliae*“ (聖オディーリアの生涯) に伝説として伝えられているのみであり、これ以上に古い文書記録は存在しない。



図1 礼拝堂脇祭壇に設置されたオディーリア像 (T. Klem 作, 1892年頃)



図2 修道院中庭に設置されたオディーリア像

どちらも眼の描かれた聖書を手にしている

オディーリアはアルザス公アーダルリッヒの子として生まれるが、盲目の女の子として生まれたため、父の怒りを買い殺されるところであったのを、母の策略により乳母の手に委ねられ、後に修道院に預けられる。12歳で洗礼を受け、その際に目が見えるようになり、「光の娘」を意味するオディーリア (Odilia) の名を貰った。

成人したオディーリアは一度父に迎え入れられるが、結婚を強制されたため、再び父から逃れねばならなくなった。この父からの逃避の際、天の救いが訪れた。岩山が開き、彼女はその割れ目の中に身をひそめた。父は神の警告を悟り、娘にホーエンブルクの土地を贈り、彼女はそこに修道院を設立した。

オディーリア伝説でとりわけ重要なのが、泉の奇跡である。オディーリアは、山の上にある修道院へと登って行く際に、うめき声を耳にした。一人の哀れな乞食が疲れと喉の渇きから死にかけているのを見つけた。彼女は聖書の、モーセが岩をたたき泉が湧く場面を思いだし、神の慈悲を信頼して同じことを行うと、新鮮なきれいな水が岩場から流れ出した。この乞食は盲目であり、泉の水によって目が見えるようになったとも伝えられている。

このような伝説から、オディーリアはアルザスの守護聖人であり、かつ目の守護聖人ともされている。彼女の像や絵画は大抵アトリビュートとして、二つの目

のついた聖書を持っている。(図1, 2)

3-1-2. オットーリエ人物像との比較による解釈

『詩と真実』におけるゲーテの記述から、ゲーテも実際に現場を訪れ、オディーリアにまつわる奇跡の話を聞いたことが分かる。彼はこの聖女の話をもとに『親和力』のオットーリエの神聖化を描いたのだと考えられる。『親和力』のオットーリエは子供を死なせてしまった後、「神さまはおそろしい仕方私の眼を開き、自分がどんな罪過の中にとらえられているのか、判らせて下さいました」¹⁾(第二部第十四章)という発言をする。この「神さまが目を開いた」という表現は、聖オディーリアの奇跡を連想させる。

聖オディーリアの伝説をもとに聖別の条件を考えてみると、「処女であること」「人格の高さ」「キリスト教徒としての献身的な実践」などが考えられるが、やはり一番重要視されるのは「奇跡の達成」であろう。オディーリアは、洗礼の際に自分自身の視力を取り戻し、そして後に盲目の乞食に対して泉を湧かせ視力を取り戻させるという、奇跡を達成させている。

ここで『親和力』のオットーリエを見てみると、彼女もまた、奇蹟を起こす場面が描かれている。第二部第十八章で、オットーリエの死に間接的に関与してしまったことで自責の念に駆られた少女ナンニイは、屋根裏部屋から落下し、瀕死の状態であったにも

かわらず、オットーリエの亡骸に触れると怪我が治る。そしてオットーリエの棺が安置された礼拝堂には、奇跡を信じて病人や老人が治癒を求めてやって来るようになる。

以上のことから、聖オディーリアとオットーリエの類似性、また、そのことによるオットーリエの神聖化は強固なものとなる。聖オディーリアは死んだ後、殉教者ルチアの仲間に入ったと言う。聖オディーリアの現世での生活は非常に禁欲的なものだった。よって、オットーリエの死を、罪の意識からの贖罪による殉教とみる見方も、聖オディーリアとの類似から可能となる。

3-1-3. 今日における巡礼の様子

オディーリエンベルク修道院は、今日においても名立たる巡礼地の一つであり、山奥で交通の便が悪いにもかかわらず、多くの人々が巡礼にやってくる。礼拝堂の中には、聖オディーリアの遺体を収めた棺が今でも安置されている。神聖な雰囲気漂う修道院の中でも、この棺の安置された部屋はひととき厳かな空気に満ちていた。巡礼の人々は十字を切り、祈りを捧げていた。(図3, 4)

また、修道院から15分ほど歩いて山道を下って行くと、オディーリアの泉 (Odilienquelle) と呼ばれる湧水がある。これはオディーリアが盲目の乞食に対し奇跡を起こして湧き出した水だとされている。報告者が訪れた日は雨で、山中の足場があまり良くない中を歩いてこなければならぬにもかかわらず、たくさんの人々が水を汲みに訪れていた。高齢で息を切らしながらやってくる人もいた。皆有難そうに水を汲み、中には眼にこすり付けている人もいた。(図5)

このようにこの修道院は巡礼地としての効果を今でも存続させている。ゲートの訪れた1771年は、プレモントレ会による保護もあり、巡礼が盛んに行われていた時期に当たる。ゲートがどこまで詳しく聖オディーリア伝説について聞いたのかは定かではないが、オットーリエの描写には聖オディーリアと重ねて見るのできる個所がいくつかあり、だからこそ彼女の神聖化がより強固なものとなっているのは事実である。文学作品の中においても、聖女伝説、またその巡礼地としての効果が見られるのである。



図3 礼拝堂内の棺安置部屋



図4 オディーリアの棺「SEPULCRUM SANCTAE ODILIAE VIRGINIS (聖処女オディーリアの墓所)」の文字が刻まれている



図5 オディーリアの泉 (Odilienquelle)

3-2. 庭園様式の変遷に関して

3-2-1. ヒルシュフェルトの庭園論

当時のドイツの庭園論者であり、ゲートも影響を受けたとされるヒルシュフェルトであるが、彼はキール大学の教授であり、また、果樹園芸学校長を務めた人

物である。彼の研究分野は幅広く、芸術、歴史、文学、政治科学、そして園芸・果樹栽培論に及ぶ。彼の最大の著書は、1779年から85年にかけて著された全



図6 ディアナ像



図7 ヴィーナス神殿 (Venustempel)



図8 ルソー島 (Rousseau-Insel)

五巻から成る『庭園芸術論』*Theorie der Gartenkunst*である。この『庭園芸術論』は、美学、哲学、歴史など様々な角度から庭園に関して論じているが、庭園に関しての明確な定義は述べられていない。だが、彼の庭園論において重視されていることは、「風景と人との相互作用」であると言える。彼は、造園者の凝らした趣向によって、庭園が訪問者に対して与える影響が、人を内省へと向かわせると言う。ただ庭園を観察するだけではなく、人と庭園が相互作用することで生き活きとした様々な感情が起こる。精神と肉体両方の動き (Bewegung) がヒルシュフェルトの理論の基礎となっている。そしてそういった作用をもたらすのは、自然と一体となった風景庭園なのである。

3-2-2. ヴェルリッツ庭園 (Der Wörlitzer Park)

ゲーテはヴェルリッツ庭園に影響を受け、それを模範としてワイマールの庭園を造り出した²⁾。そのヴェルリッツ庭園に関しても、ヒルシュフェルトは『庭園芸術論』のなかで言及し、「ドイツで最も素晴らしい庭園の一つ」と評している³⁾。ゲーテ自身もこの庭園を非常に評価し、1778年5月14日のシュタイン夫人への手紙にも記している。「ここは今限りなく美しい。[...] あたかも神々が幻想を作り出すのを許したかのようだ。あちこち歩き回ると、メルヘンを披露されたかのようで、全く極楽の野の性質を備えている。穏やかな多様性の中に何もかもが流れ出し、視線と欲求をただ一つの点に惹きつけるような高みはなく、人はどこから来てどこへ行くのかを尋ねることなく彷徨い歩く」⁴⁾。

報告者が実際に散策してみたところ、ゲーテの記述にもあったように、川、島、橋や、また、洞窟や立像 (ディアナ像、ヴィーナス像などの神話上人物像、また、パンテオンなどの建築物もある) などがあちこちにあり、曲がりくねった道を行くと至る所に目を引き付けられ、非常にロマンチックな庭園という印象を受けた。道が複雑に曲がりくねり絡み合い、迷路のような迷園 (Labyrinth) もあった。この庭園の製作者フランク侯爵はルソーを尊敬しており、庭園内のルソー島と呼ばれる島には、ルソーの記念碑が置かれている。(図6, 7, 8)

3-2-3. ワイマール庭園 (Der Weimarer Park) と

ゲーテの山荘 (Goethes Gartenhaus)

ヴェルリッツ庭園や、また、ヒルシュフェルトの著作を通じて風景庭園に興味を抱いたゲーテによって造



図9 ゲーテの山荘 (Goethes Gartenhaus)



図10 ワイマール庭園 (Der Weimarer Park), 左の建物はゲーテの山荘

園されたのが、ワイマールのイルム川沿いの庭園である。そしてその一角にはゲーテの山荘と呼ばれる建物がある。(図9)

報告者が実際に散策したところ、ワイマールの庭園も、ヴェルリッツ庭園同様に、曲がった道、川によって構成されているものの、洞窟や、神話上の人物の立像、迷園などは存在せず、いたって「自然」な穏やかな庭園という印象を受けた。ゲーテの関心が非日常的な陶酔的な自然の美しさから、日常的な自然の美しさへと移行していることが分かる。ゲーテは、イギリス式風景庭園の、自然との一体感、人の眼を楽しませる風景は高く評価していたものの、感傷的な気分に誘う、過剰なまでに凝らされた趣向、不自然なまでの多様さには批判的であったのかもしれない。(図10)

3-2-4. ゲーテハウスの庭

ゲーテは1782年に公務などの都合により、市内のフラウエンプランの家を借りて移り住む。このゲーテハウスには庭が隣接している。

この庭を実際に散策したところ、長方形で、直線の道が十字に交差しており、形としては整形庭園の様式を取っていた。だが、そこに植えられている植物は、素朴なものばかりである。この庭は、整形庭園の形を取ってはいるものの、非常に素朴な美しさと、実用性を持った庭である。この庭にはもはやヴェルリッツ庭園に見られるようなロマンチックさは見られず、イルム川沿いの庭園のような広大さもない。もちろん、市内の敷地内に広々とした風景庭園を造ることは不可能であったろうが、ゲーテの関心が感傷的なものよりも、素朴でつつましい美しさへと移行していることが分かった。また、ゲーテは庭園論よりも、庭園の中の

植物に関心を寄せ、植物学研究に向かっていった。空間全体として作り出す壮大な美しさよりも、個々の植物の自然な美しさを追求していくようになった結果が、このゲーテハウスの庭によく反映されていると感じた。(図11, 12)



図11 ゲーテハウスの庭



図12 ゲーテハウスの花壇



図13 グロースコッホベルクの庭園



図14 庭園(Park)内に設けられた花の庭(Blumengarten)

3-2-5. グロースコッホベルク (Großkochberg) の庭園

一般的には『親和力』の舞台はワイマールのイルム川沿いの庭園がモデルだとされるが、ラヴェによるとグロースコッホベルクの庭園にもその痕跡が見られるという⁵⁾。

グロースコッホベルクは1733年にシュタイン家の所有地となり、シャルロッテ・フォン・シュタインと親しかったゲーテも1775年から1788年にかけて何度か訪問している。城館に隣接する庭園は、シュタイン夫人の長男カール・フォン・シュタインによって1797-1840年頃にかけて、整形庭園から風景庭園への作り変えがなされたものらしい。ゲーテの最後の訪問は1788年のため、報告者が調査した庭園様式のことをゲーテが実際に目にした可能性はないのかもしれないが、『親和力』完成が1809年であることを考慮すると、執筆当時、手紙や人づてで話は聞いていたのかもしれない。

報告者が散策してみたところ、庭園には曲がった道や池などが配置され、風景庭園の特徴が見られた。イルム川沿いの庭園と比較すると、こちらの方が木が密集して影が多く、実際に歩いてみても、木々の中をあれどもなくさまようような感じがした。そういった点からすると、ロマンチックなヴェルリッツ庭園の雰囲気に似ているように思われた。また、当時の風景庭園にしばしば見られるように、庭園 (Park) のなかに、小さな庭 (Garten) が設けられていた。この庭はたくさんのお花で彩られ、非常に美しかった。行く先のわからない道を彷徨い歩いていくと、池や廃墟、また、美しい花に彩られた庭が突如として現れるなど、造園者の凝らした趣向が散在しており、この庭園にはヒルシュフェルトの影響を見て取ることができると感じ

た。(図13, 14)

4. おわりに

今回の調査では、オットーリエの聖別化を考察する手がかりとして、聖オディーリアに関する文献収集、巡礼の実態調査を行い、また、『親和力』での庭園の扱い方を考察するため、ゲーテに関わりのあった庭園を散策・観察した。

前者に関しては、オディーリエンベルクでの実際の巡礼の様子を見、また、聖オディーリアに関する文献も入手することで、オットーリエの聖オディーリアとの類似、そしてそのことによる彼女の聖別化を肯定的に見る証拠を集めることができた。

また後者では、ゲーテの庭園観の変遷をたどるために4つの庭園を比較してきたが、初期のゲーテは感傷的でロマンチックな庭園を賛美していたものの、時代を追うごとに質素で素朴な美しさ、しかも、庭園という大きな空間というよりもむしろ、それを構成する個々の植物へと関心が移って行ったことが分かった。

ある研究によると、『親和力』において、オットーリエとエドゥアルトはフランス式整形庭園、もしくはもっと古い庭に、大尉とシャルロッテはイギリス式風景庭園に属するとされ、対立する図式として捉えられている⁶⁾。オットーリエの聖別化が肯定され、しかもゲーテが最終的には整形庭園を支持するようになったのだとすれば、それは何を意味するのか。今後の研究における考察課題としたい。

注

1) Goethe, J. W.: *Die Wahlverwandtschaften*. Stuttgart: Reclam 1956. S. 232.

- 2) Kampen, Wilhelm van: *Dessau und Wörlitz*. Waldersee Verlag, Halle(Saale). 2005. S. 119–120.
岡崎文彬『造園の歴史Ⅱ』同朋舎1982年, 263頁
- 3) Hirschfeld, C. C. L.: *Theory of Garden Art*. Edition and translated by Linda B. Parshall. Philadelphia. 2001. (Originally published in five volumes, 1779–85) p. 440–441.
- 4) Goethe, J. W.: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 1775–1786*. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt am Main. 1997. S. 129.
- 5) Rave, Paul Ortwin: *Gärten der Goethezeit*. Berlin. 1981. S. 63.
- 6) 西川智之「ゲーテの『親和力』」(『言語文化論集』2 (2011) 129–147頁), 134–138頁

参考文献

第一次文献

- Goethe, J. W.: *Die Wahlverwandtschaften*. Stuttgart: Reclam 1956.
(邦訳: ゲーテ『親和力』柴田翔訳 講談社文芸文庫1997年)
- Goethe, J. W.: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 1775–1786*. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt am Main. 1997.
- Goethe, J. W.: *Dichtung und Wahrheit* (Auswahl). Stuttgart: Reclam 1993.
(邦訳: ゲーテ『詩と真実』(全4巻) 山崎章甫訳 岩波文庫1997年)

第二次文献

- 岡崎文彬『造園の歴史Ⅱ』同朋舎1982年
- オットー・ヴィマー『[図説] 聖人事典』藤代幸一訳 八坂書房2011年
- 西川智之「ゲーテの『親和力』」(『言語文化論集』2 (2011) 129–147頁)
- Ahrendt, Dorothee u. Aepfler, Gertraud: *Goethes Gärten in Weimar*. Leipzig. 1994.
- Fischer, Marie-Thérèse: *Das Leben der Heiligen Odilia*. Éditions du Signe. 2007.
- Förster, Jürgen u. Gablenz-Kolakovic, Silke: *Schloss Kochberg*. Klassik Stiftung Weimar. 2008.
- Güse, Ernst-Gerhard u. Oppel, Margarete: *Goethes Gartenhaus*. Klassik Stiftung weimar. 2008.
- Hirschfeld, C. C. L.: *Theory of Garden Art*. Edition and translated by Linda B. Parshall. Philadelphia. 2001. (Originally published in five volumes, 1779–85)
- Holler, Wolfgang u. Knebel, Kristin: *Goethes Wohnhaus*. Klassik Stiftung Weimar. 2011.
- Kampen, Wilhelm van: *Dessau und Wörlitz*. Waldersee Verlag, Halle (Saale). 2005.
- Minor, Jean-Marie Le, Troestler, Alphonse u. Billmann, Frank: *Der Odilienberg*. I.D.l'Édition. 2011.
- Rave, Paul Ortwin: *Gärten der Goethezeit*. Berlin. 1981.
- Wackenheim, Charles: *Der Odilienberg*. Éditions du Signe.